

文 教 福 祉 常 任 委 員 会 記 録

令和6年12月18日（水）午後1時20分～午後3時25分（9階909会議室）

○出席委員（8名）

委 員 長	川又 康彦
委 員	佐藤 勢
委 員	遠藤 幸一
委 員	佐々木 優
委 員	石原洋三郎
委 員	大平 洋人
委 員	宍戸 一照
委 員	半沢 正典

○欠席委員（1名）

副委員長	高木 直人
------	-------

○市長等部局出席者（なし）

○案 件

所管事務調査「児童生徒の体力の向上に関する調査」

1 参考人招致

福島大学人間発達文化学類スポーツ健康科学コース 教授 小川 宏 氏

2 参考人招致に対する意見開陳

3 その他

午後1時20分 開 議

（川又康彦委員長）ただいまから文教福祉常任委員会を開会します。

本日、高木直人委員より欠席の連絡をいただいておりますので、ご報告いたします。

本日の議題は、委員会の次第のとおりです。

初めに、参考人招致を議題といたします。

本日、参考人として福島大学人間発達文化学類スポーツ健康科学コースの教授、小川宏氏にご出席

いただき、話を伺います。

まず、参考人招致に関して注意事項を申し上げます。1点目ですが、参考人はあらかじめ依頼した事項、事前質問について意見を準備して出席いたします。そのため、事前質問以外の事項について意見を求めた場合、委員長は委員の発言を制止することができますので、ご了承願います。ただし、参考人の了承を得られるならば意見を求めることができます。

2点目ですが、参考人招致は証人と異なり、百条調査のような強制力がなく、委員から依頼して出席を求めるものですので、参考人に対しては礼節を尽くし、追及するような質問はしないでください。

3点目ですが、本日のスケジュールは次第及び参考人招致実施要領の5、当日の進め方のとおりになります。説明が45分、質疑応答を45分とさせていただきます。また、終了後に意見開陳を行います。

それでは、参考人を案内してまいりますので、暫時休憩します。

午後1時21分 休 憩

午後1時26分 再 開

(川又康彦委員長) 委員会を再開します。

本日は、児童生徒の体力、運動能力の現状と課題、向上策について聴取し、調査の参考とさせていただくために、福島大学人間発達文化学類スポーツ健康科学コース教授、小川宏氏にご出席をいただいております。

この際、参考人に一言ご挨拶申し上げます。本日、お忙しい中、文教福祉常任委員会のためにご出席いただきまして、誠にありがとうございます。委員会を代表して心から御礼申し上げますとともに、忌憚のないご意見をお述べくださるようお願いいたします。

早速ですが、議事の順序等について申し上げます。初めに参考人からご意見をお述べいただきまして、その後委員の質疑にお答えいただくようお願いいたします。

それでは、参考人から発言をお願いいたします。着席のままお話しくださって結構でございます。

(小川 宏参考人) 皆さん、こんにちは。福島大学の小川と申します。本日はお呼びいただき、ありがとうございます。体力向上に関しましては、話にもところどころ出てきますが、小学生の運動身体づくりプログラムでは開発のお手伝いをさせていただいて、完成して普及されたところで普及の状況についても調査したりということはさせていただきました。あとは、最近、現在もそうですが、自分手帳が12年にわたって配付されるということが続いていますので、そこについてのちょっと改革といえますか、冊子ではなくてデジタル化したほうが活用は広がるのではないかとということで、そういったことでの研究をしており、この間、先週熊本にてちょっと学会で発表してきて、ちょうど終えて一息ついているところでございます。そんな話もちょうど後半に入れながら、体力の向上策まで話できるか分かりませんが、これまでの現状を私の分かっている範囲と県から近年のデータを頂きま

したので、そこでちょっと分析できる範囲でさせていただきましたので、お話しさせていただければと思います。

では、パワーポイントを作ってきましたので、ご覧ください。これは、平成18年から令和4年までの、毎年ではないですけれども、3年か2年ぐらいごとずつに追っていった体力テストの種目別の福島県の特徴ということで、男女別で、今回これは男子のほうになります。小学1年から高校3年の12学年、それが福島県の平均値が全国平均を有意に上回ったところ、あるいは有意に下回ったところの数をグラフ化しました。なぜかという、小学1年から高校3年までってすごく幅広いので、小学校何学年の何の種目がどうこうというところすごくばらばらになり過ぎて、特徴が逆につかめないなというふうに思ったので、全国と比べて福島県の体力の種目で何が劣っていて、何が上がっているのかについては単純に有意に高いか低いという個数が何個あるかということでもまとめたものです。上のグラフと下のグラフが分かれているのは、種目が8種目と多いので、折れ線にしてしまうとめちゃくちゃになってしまうので、4つと5つに分けてありますということです。

グラフを見ていただければ一目瞭然ですけれども、縦の赤いこの棒は平成23年を示していますので、震災のラインというふうに考えてください。これを見ますと、震災以降ほとんどの種目で全国を下回っているということが分かるかと思います。種目でいいますと、中でも上体起こしとシャトルラン、上体起こしはこのオレンジで、シャトルランはこっちのオレンジですけれども、これがすごく下のほうを推移していることが分かりますので、男子については上体起こしとシャトルランが低いことが分かります。その中でも、悪い中でも比較的よい種目というのは握力と立ち幅跳びというふうになっていて、握力はこの青グラフ、立ち幅跳びはこっちの黄色のラインで、全国平均に近いぐらいのところを何とか推移しているということになっています。なぜそうなのかについては、ちょっと分析のしようがないので、分からないのですけれども、握力については結構前から福島県はまあまあいい成績を収めていて、前にそれと学力との関係を一回調べたことあるのですけれども、学力が低い子の握力が高いというデータがそのときは出ていて、ううんって考えて、僕が思いつく範囲としては、問題が解けなくて鉛筆をううんって握り締めてしまうのではないかなとかということを考えましたけれども、すらすら書ける子はあんまりあれだけでも、考えない子はううんってこうやっていて鍛えられるのではないかなという考えをしてみるとか、ちょっとよく分かりません。握力については、福島県は前からよかったです。

これは女子です。女子も大体似たような傾向で、同じように震災を境に体力が低下しているということが分かります。それまでは結構全国を上回っていたのもあるのですが、その後やっぱりぐっと下がってきて、最近ちょっとこっちのほうに戻りつつありますが、震災以降は、直後のところはすごく下がっているということが分かります。これも同じように中でも上体起こしと長座体前屈、シャトルランが低かったということで、上体起こしはオレンジのライン、長座体前屈、女子なので、柔軟性って男子よりも高いような感じはしますが、これは全国の女子の平均と比べると低いということで

す。シャトルランも低くなっています。女子で比較的よい種目は、やはり握力と反復横跳び、立ち幅跳びということで、女子のほうは反復横跳びの結果もまあまあいいということが分かっています。

男子と女子を混ぜた全部の合計で、8種目を全部まとめてしまって、その個数の上回った、下回ったの有意差をまとめたのがこの折れ線グラフになります。さきほどのものを全部まとめたと思っていただいて構いません。そうすると、やはり、だから震災前からちょっと落ち込みぎみですけども、震災を境にずっと下がってきて、だんだん追いつきかけてきたというところにあることが分かるかなというふうに思います。コロナ禍では全国的に運動しないということが起こりましたので、その中で福島県としては継続的に一生懸命全国平均を目指して頑張ってきましたので、そこでまたちょっと差が縮まったということが言えるかと思います。全国ではちょっと待ったがかかったみたいなことで、そこでちょっと追いつく感じになったのかなというふうには見えています。

これは令和4年度の運動頻度別総合評価の割合、質問の中に運動する子は体力が高いみたいなことがあるのかという質問がありましたので、そこに対して少し調べてみました。これは見た感じで斜めになっているのわかりますか。つまり上に行けば行くほどたくさん運動している子たちですけども、運動している子たちの、これはAのほう体力合計点の高い子たちの評価になりますので、すごく高い子あるいはそこそこ高い子の割合が非常に高いものがあるので、これは当然といえば当然ですけども、たくさん運動している子の体力は高いということがわかります。

これは、さっきは頻度でしたけれども、総運動時間と体力合計点の関係です。これも同じですね。1日2時間以上運動する子は、小学生なので、おそらくスポ少とか、そういうので活動している子たちが多いのかなと思いますけれども、これも同じように斜めにどんどん、どんどん運動時間が増えれば増えるほどA、Bの割合が高くなっているということが分かるし、体力の低い子はほとんどいない、2時間運動している子で低い子はほとんどいないということがわかります。これもたくさん運動すればするほど体力合計点が高いといえますか、体力に自信がある子たちはスポ少でさらに運動するので、当然そっちのほうに流れていくということが、どちらが先か分かりませんが、そこは合致しているということです。

これは、令和4年の入学前の外遊び頻度と体力総合点、幼稚園とか幼児期にどのくらい外遊びしていましたかという質問を同じように聞いていますので、そこに関連させたグラフになります。これも一目瞭然、そのとおりですね。毎日のように運動していた子たちの体力合計点の評価は非常に高い割合が多いということがわかります。小さい頃から運動していた子の体力得点は高いということが分かる。小さい頃に、週1以下、このぐらいしか運動していない子たちのDやEの割合が高いということがわかります。

今度は令和4年の都市区分別体力総合点ということで、運動習慣等調査の中ではどこに住んでいますかというのを学校ベースで聞いています。それでいうと、3分割なので、15万人以上の市なので、福島市、郡山市、いわき市の3つが一番上に入り、いわゆる都市圏ということですね。そして、これ

は中間のそれ以下の市、これは町村ということで田舎のほうが多いのかなというふうに思います。これで分けて分析をしてみました。そうすると、町村の子供は大都市の子供に比べてA、Bの割合が高いということが分かります。何となくイメージしやすいというか、田舎の子供が何か野山を駆け回っているというイメージとここでは同じような結果が出ました。中学校になっても、少しですけれども、割合が多いということが分かって、その傾向が少しは出ましたということです。

都市区分別の肥満、痩身度についてこれも調べてみました。これでいいますと、町村の中学生は肥満傾向生徒の割合が、大きな市、15万人以上の市と比べて有意に高いという数字が出ました。1%水準なので、まあまあ確かかなと思いますけれども、ここはさっきの運動能力が高いということと少し矛盾するというか、無理やり結びつけてしまうと動けるでぶが多いみたいな、言い方悪いですが、ということになって、理由がよく分からないですけれども、ここはなぜかこちらが出たという。ただ、動いているけれども、食べるものは食べるということなのか、より都市になってくると小学校よりも中学校のほうで痩身の割合がちょっと大きくなっているの分かりますか。なので、都会で大きな中学校とか、思春期なので、女子とかそういうのはやっぱり太ったりする見た目みたいなのを町村の子よりは意識することによってあんまり食べないとか、そういうことで痩せていこうとする意識が若干強く働くのではないかと。町村の子たちはあんまり関係なく食べたいものを食べつつ元気に運動するみたいなイメージを私は勝手に抱いたのですけれども、数字としてはそういうのが出ましたということです。

これは、生活習慣と体力総合点について調べました。まずは、睡眠時間と関係があるのかなということですが、明らかに6時間未満、小学生で6時間寝ていないような児童は総合点が低いということが分かります。やっぱり不規則な生活になりますかね、遅くまでゲームしているとか、テレビ見ているとかということになってくると、極端にA、Bの割合が低くなっていることが分かります。

右側は画面の視聴時間別総合評価、左側は睡眠時間、右側は画面のほうですけれども、同じですよ。3時間以上テレビやゲームの画面を見ている子たちのA、B、青とオレンジのところはほかに比べて低くなっていますということで、やっぱり画面を見る分だけ運動していない時間になりますので、これは当然そういうふうになるのかなというふうに思います。総合点は低くなっています。

令和4年度ですが、全国と福島の5段階評価の比較をしています。2つずつに分かれていて、小学5年の福島の割合と全国の割合、女子の小5の割合と全国の割合。こちらは中学2年生の女子の福島と全国というふうになっています。特徴としては、小学校でいうと男子は、全国に比べてA、Bの割合が少なく、D、Eの割合が多いということで、やっぱり体力としては全国に比べて劣っているということが分かります。女子については、なぜかといいますか、Aの割合は全国よりも高くなっているのです。

中学校のほうですけれども、右側、男女ともA、Bの割合が少なく、D、Eの割合が多いので、これは男女ともに全国に比べると劣っているということが分かります。

二極化しているのかというご質問もありましたけれども、そこについては、グレーのところが中間層かなというふうに思いますので、そういうふうに考えてみたときに、フタコブラクダみたいな二極化にはあんまりなっていないのかなというふうに思います。中間層が一定いながら、高い子もいれば低い子もいると。福島については低い子の割合がまあまあ多いということが分かるという感じです。

令和4年の肥満、痩身傾向別の総合評価になります。これは、左側が小学校男子、右側が小学校の女子になります。男子は、マイナス10%からゼロとマイナス20%からマイナス10なので、痩せ傾向ですよね。痩身児というのは、マイナス20%よりも少ないのを痩身児といいますけれども、その手前、標準なのだけれども、真ん中よりはどっちかという痩せぎみの子たちというところの体力が男子は高いことが分かります。女子もマイナス10%からゼロなので、標準なのだけれども、どちらかというと痩せのほうにちょっと偏っているような子たちのほうが体力の合計点は高いということが分かります。

これも上に行けば行くほど肥満傾向が高まっていくわけですが、そうしていくとどんどんA、Bの割合が少なくなっていますので、太っていけばいくほどやっぱり体力の合計点は低くなっていくというグラフになるのかなと思います。ただ、逆に痩せている子はここまで痩せてしまうとやっぱり体力が低いですが、女子のほうはかなり痩せていても体力のあれはあんまり低くならない、逆に言うとなんかそういうことが分かります。細くても動ける子はたくさんいるということですね。

これは中学生です。これも同じような傾向を示していますね。でも、ちょっと違うのはゼロから10%のところが最高値になっています。中学生になるとちょっと筋肉との関係が多分出てくるというか、小学生のときは、筋肉なくてもすばしっこく動けたりすると体力点が高まるのですが、中学校になると、やっぱりボールをしっかりと投げれるとかということで、筋肉がそれなりについてくる子たちのほうが体力合計点はどうしても高くなっていくので、標準なのだけれども、ゼロから10%なので、どちらかというがっしり体型という人のほうが体力は高くなっています。同じようにそれ以上になっていくと体力合計点はどんどん低くなっていくという矢印になっています。

女子も10%からマイナス20%のところ、このところですね、このところはあんまり変わらないということで、女子についてはやっぱり筋力よりもすばしっこさみたいなことで、そんな男子ほどの低下傾向は逆に見られない。男子は、やっぱり中学校の測定になっていくと、筋力がないとどんどん、どんどん体力合計点は落ちていってしまいますので。女子のほうはそうではないということが分かります。

1日の運動時間についてです。上が女子、下が男子。右側が中学生の1日の運動時間で、上が女子で、下が男子。これを見ますと、男女とも中学生になると1時間以上運動する生徒が多くなるということで、これは福島県でいうと運動部活動への所属率が非常に高いということが言われていますので、部活に入って、そこで運動する場がしっかりと設けられていると。小学校だとスポ少って入る子が限られていますので、そうではない子はあんまり運動しないのですけれども、部活の中で動かされて

いるということが分かります。

中学校になると男子は30分未満がやっぱりすごく少なくなっているのが分かりますので、しかも男子のほうで運動部活動に入る割合は結構高いので、そこでしっかり運動させられているということが分かるかと思います。

一方、女子は動かない割合は中学校になっても減らないのですよね。つまり女子の運動部活動への所属が男子よりも多くないということで、文化部に入ったりとかというふうにしてしまうと、この割合は変わらないということになります。そういう意味では女子のほうはちょっと動く子と動かない子が中学校になるに従って分かれて、そういう意味では二極化ということが言えるかもしれないです。この部分とここの部分に分かれていってしまって、中間層がすごく少ないと。文化部に入ったり無所属の子は全然動かないけれども、運動部に入った子はしっかり運動できるという環境になっていることが分かるかなと思います。

コロナによる影響はあるのかという質問があったと思いますので、それによる合計点の影響を見ましたということです。これは体力合計点なので、47点とかという数字になっています。これはこういう感じですかね。青色が福島県、赤が全国になっています。当然全国のほうが高いのですがけれども、男女とも赤のラインはコロナが発生したと、影響を受けたであろうという時期を示しています。ここからですね。どちらも下がっていることが分かります。どちらも低下しているのですが、福島県は低下幅が少ないことが分かりますね。特に男子のほうはちょっと横ばいに近いような感じで頑張っていることが分かって、全国的にはここは運動しなくなったので、下がっていったので、結果的にはちょっと近づいたということが分かります。こっちも、女子も下がり幅は全国のほうがすごく下落したので、女子も下がってはいるけれども、全国との差は縮まったということが実際なのだなというふうに思います。影響はあったが、福島県は頑張ったという感じですかね。

次に、震災前後、コロナ発生前後の肥満傾向児の出現率になります。平成23年3月が震災ですので、これが震災前で、こっちが震災直後、そして最近ということで示しています。令和元年から令和3年でコロナが発生してどうなったかということを示すかというふうに思いますけれども、コロナは全国で起こっているので、全国的にも令和3年になってだんだん運動するようになってきたので、違う、違う。令和3年は影響をまろに受けていたところですね。2年ぐらい運動あんまりできなかった。ですので、肥満傾向児は福島県も全国も両方とも上がっているということが分かります。これでいうと、福島県の子の上がり具合がちょっと大きいですね。なので、そこはちょっと深刻なところかなというふうに思います。どちらも増加したということになります。

震災のところと比べてではどうなのだというふうに見ていくと、今のほうここが一番高くなっている、震災の前後でここちょっと上がっているのだけれども、でも今のほうが多いということが分かるので、だから震災ですごく肥満傾向児が増えて危機的状況だなんていうふうにすごく叫ばれましたけれども、数字でいうと今のほうが肥満傾向児は増えているということが、あんまり大きくは言われて

いないですけれども、結構大きな問題なのに、ちょっと今コロナは全国的な影響だったので、あんまり取り沙汰されない。震災は福島県だけの特徴だったので、どうなったのだってみんなに関心持たれたから、きっとそれで増えたのだろうというふうなことが予想されて、ニュースにもたくさん載ったりしましたけれども、実際ここに、隠れ肥満かなと思いますけれども、こっちのほうが実は深刻だぞということがあります。

こちらは、体力テストのほうの経年変化になります。左側が男子、右側が女子になります。全国との差ですよ。平成21年の女子は福島県のほうが高かったのですけれども、震災で逆転して、そして近年は同じようにやっぱり差は広がっているということが分かります。こう考えてみると、震災の後、体力も下がったよというふうにして全国の数値的にも結構下に下がったりとかしましたけれども、実際の数字で見ると今のほうが全国に水をあけられている部分もあるということです。

令和4年度の体力テストの全国と福島の比較になります。男子と女子になります。小学1年からずっと並べたものです。差が小さいので、ちょっと分かりにくいですが、小学校のときにはやっぱり左側が本県、濃いほうが本県なので、体力合計点は全国にはちょっとかなわない感じで小学校の時期を過ごしているのですけれども、違う人たちですけれども、中学校でも差があるけれども、実は高校段階になると逆転しているというのが分かります。ですので、高校になると男子では体力は全国を上回っているのです。女子もそこはちょっと上回っています。ということで、これは非常に最後のところでは逆転しているということが分かります。なので、小中でいうと深刻で全国にかなわない、かなわないと言われているのですが、そして全国の調査って小学5年と中学2年を取り上げるので、それが小と中の代表で、それが県の代表みたいになるのだけれども、意外に高校段階で頑張っているのか、体育の授業での体力テストに向けての練習ではないですけれども、そういったことの取組を比較的しっかりやっているなんていう話をちょっと聞いたことがありますけれども、あんまり高校の体育そんなに流さないで、体力テストあるからなみたいなこと、ちょっとそういうものの活動で体力トレーニングみたいなことをちゃんとやってみたいなことの取組の結果なのではないかなというのは言っていましたけれども。女子のほうについては、小学校でもところどころ上回っているところはあるということです。なので、これは女子のほうに先に全国にちょっと近づいてきたねと言われていることになります。

肥満傾向児になります。これも濃いほうが福島、右側が全国なので、小学校は軒並み男子、中学校から高校になるとちょっと収まるけれども、小学校の中での全国との差が大きいということが分かります。中学校になるとちょっとは全国に肩を並べるぐらいになる、中学校以降は差が縮まるという結果が言えるのかなと思います。

問題はこちらですね。女子は高校の肥満傾向児出現率が全国値よりもかなり高いというのが、これ令和4年なので、令和5年はまだ出ていないので、分かりませんが、令和4年の数字を見てちょっと驚いたところはここかなというふうに思います。途中までは男子と同じような傾向で、まあし

ようがないねってなるのだけれども、ここから一気に、全国的には下がっていくのに、この辺は一気に突出して大きくなっているんで、高校段階の女子がちょっと調査の内容的には気になるところかなというふうに思います。何でこうなっているのかはちょっと分かりませんが、やっぱり都会とか全国的に比べてそういうのに、食べるとか、そういう体形とかに頓着しないということなのかどうなのか、これは東北のほかの県も見ても分からないと思いますけれども、ここだけは心配なところではあります。このまま社会人になってその習慣がついてしまうと、その先ちょっと恐ろしいなという感じがします。

震災の前後と近年の肥満傾向児の出現率になります。左が、男子。男子は、震災によって肥満傾向児の出現率が増えたのですが、令和元年になると減少していききました。これは震災前、震災後、そして最近。女子は、実は震災の前後ではほとんど変わっていないですね。その後減少したということが分かります。決して上がってはいない。このときに女子が上がっていないのに、最近の高校生何で上がっているのかなというのがちょっと不思議なところではあります。いずれにしても全国の数字が低いことが分かるので、その差はあるということです。

小学生から高校生の震災前後と近年の体力の合計点のほうになります。男子は、震災によって低下した体力が復活しました。さっき折れ線グラフで見せたとおりです。女子も震災によりやや低下しましたが、令和元年は大きく向上したということで、男子よりも復活の大きさが大きいということが分かります。全国的に男女ともこの10年で向上しているのですよね。全国値が向上しているんで、こっちも頑張っているのだけれども、追いついていないという、むしろ広がっているということが分かります。分析した結果については以上になります。

これは2023年、2年前ぐらいですか、の話ですが、ふくしまっ子体力向上総合プロジェクトの評価委員会というのがあって、そこで私出席できないので、コメントを伝えてくださいというふうに言った文章を最後に、近年の私が考えていることをまとめた文章でもあるので、最後に載せさせていただきました。

体育や食や保健に関する各地区からの報告を拝見しました。自分手帳の活用や運動身体づくりプログラムの定着、朝食を食べる習慣づくりなど、県の施策として学校に求めることについて、福島県の先生方はとても真面目に正面から取り組み、着実に成果を上げていることが分かりました。努力に頭が下がる思いですとした上で、ただあまりにも真面目に、かつ忠実に県から出された目標を達成することに邁進する学校現場を勝手に想像すると、逆に大丈夫と少し心配になってしまいます。先生方は真面目なので。昨年も申し上げましたが、例えば朝食摂取率96%という数字が出ていたのですが、私から見れば十分過ぎる数字だと思います。ただ、昨年度より1%下がってしまったという反省や、次年度は100%を目指したいなどという宣言は、コロナを完全に封じ込めると言って破綻した某近隣共産主義国のゼロコロナ政策に近づく極端な発想になりかねないという懸念があります。朝食を食べない数%の児童生徒の中には、朝食を食べない健康法を実践しているなど、個別の家庭の信念や事情があ

るかもしれません。朝食を食べない自由は認められるべきであり、朝食を食べないと言ったら非県民と言われるようなことがあってはならない。自分手帳の活用率も着実に上がっているようですが、県の予算を使って配付しているのだから、とにかく使いなさいと結果だけを求め過ぎると、とにかくICTを活用せよと求めてくる某国の政策と重なってきます。運動身体づくりプログラムも、とにかく授業の最初にやればいいのでしょうと形だけの実施になってしまっただけでは、仏に魂入れずと同じように思うような効果が期待できません。調査の結果ですけれども、プログラム実施率がほぼ100%まで上がった割に、学校に聞くとみんな使っていますというふうにしかならないので、100%だなというふうに把握するのですが、小学生の体力や運動能力がそれに比例して高まっているわけではないということは、プログラムの効果的な実施について一考の余地があると言えるでしょう。もちろん体力テストの数字を上げることがプログラムの目的でないということは、開発に関わった者として承知しているつもりですと。

要は福島県児童生徒の課題である体力、運動能力の向上とか肥満傾向児の減少、そして自己マネジメント力の向上であり、そのためのツールが運動身体づくりプログラムであり、自分手帳であり、朝食確認なのだと思います。自分手帳や運動プログラムは福島県が全国に先駆けて発信する運動、健康教育の独自施策であるだけに、ややツールの普及や活用という目標が先行してしまう傾向がありますが、単に実施率や活用率という数字や形だけの結果に向かうのではなく、児童生徒一人一人の健康や体力、運動能力の向上という実質的な効果に向かう取組とすべきである。もちろん県内教員の皆様はそんな当たり前のことは重々承知の上で取り組んでくださっていると信じていますと。

今回、体育、食、保健の全ての部門で自分手帳の活用が進んでいる報告とともに、デジタル化への見通しや要望が複数の地区から寄せられています。活用が進むほど、書き込むスペースに限りがある紙媒体の限界が課題として指摘されることになるでしょう。高校での自分手帳活用率が低いことが指摘されていますが、デジタル化することでスマホからの入力が可能になるため、むしろ小中学生よりも活用しやすくなるのではないかと考えていますと。

体力、運動能力の低下と肥満傾向児の増加という福島県の課題を解決するためには、運動習慣の形成と食習慣の改善が必要になります。どちらも自覚して続けることが大事であり、そのために自分で継続して記録し、確認できる自分手帳が開発されました。では、どうすれば継続させられるのか。先日、カリスマホストのローランドさんがテレビ番組の中で筋トレをなぜ続けられるのかと質問され、マラソンを走り始めて500メートルくらいで足が痛くなったらすぐリタイアできるけれども、40キロ地点まで走り続けたら、そこで足が痛くなくても簡単にはリタイアできない、長く続ける秘訣は続けることと言っていて、なるほどと思いました。最初は大変でも、一旦習慣化するところまで継続させられればどんどん続けたいくなるというか、やめられなくなるのだと思います。私は最近筋トレをしていますが、せっかく鍛えてきたのに、トレーニングを休むと筋力が衰えるのが怖くてやめられなくなっています。

体育、食、保健の3部門で自分手帳を使い、記録して確認する取組が進んでいる今、記録容量の上限をなくすデジタル化への移行は必須になると考えていますということで、今後デジタル化してこれをさらに活用を広めていきたいという話をここでは述べさせていただきました。これが最近考えているちょっと長期的な課題だなということのまとめになるかなというふうに思います。

30分ぐらいたちましたので、自分手帳の話は抜いて、これはこの間学会で発表した、国からちょっとお金をもらったので、自分手帳のデジタル版というのをちょっと試しに作りました。こうやって、今ICTで生徒1人1台端末を持っているので、そのところに、ウェブアプリなので、ウェブにアクセスして、そこにログインする形のギミックアプリなのですが、それを作って、附属中学校の生徒さんたちに、毎朝来たらタブレットを開いて、ログインしたら毎日の目標を定めて、昨日やりましたかとか、どのぐらいやりましたかと、昨日寝た時間どうですか、起きた時間どうですか、朝食食べましたか、今朝の気分はにこにこマークですか、ブルーマークですかみたいなことでスタンプを押させて、担任のコメントあればみたいなことで毎日入力してくださいねというのを3週間ぐらい取り組みました。先生からもスタンプが押せたりとか、コメント返せたりという機能を設けて、3週間やったのですが、そうすると毎日記録するようになったことで夜更かししないようにするなど、適正な就寝時間を意識するようになりましたかって、少しはというのはついていますが、やっぱり毎日やると今日またあしたつけるから、ちょっと寝ないとなみたいなことの意識が繰り返してやることで習慣化するし、記録式ダイエットみたいなものですね。つまり毎日体重を量るだけで痩せるってどういうことだというのは、体重計に乗っかるのだと思うと、このシュークリームを食べようかなと思ったときにやめておこうというふうに、結果を毎回知らされることになることで自制心が働いていくみたいなことが起こっていくということかなというふうに思います。なので、記録させるだけで今日はもう寝るかなというふうに思う気持ちがちょっと働くようになるという結果かなというふうに思います。同じですね。

あと、デジタル化のメリットはあるなというふうにまとめて報告をさせていただきましたということです。

最後、私の説明のまとめになります。今考えていることですが、児童生徒の体力向上について目に見える成果を出しましょうということは言うのですが、これは結局長期的な課題なので、時間がかかるというふうに思っています。そんな簡単に何かをやったから、大きく上がるとか、全国の上位に行きましたということは、やらせでない限りなかなか出ないということがあります。ここだけの話ですが、私体力が低下したときに、急に全国の数値がトップのほうに上がった県を調査して、どんな取組しているのですかみたいなことを調査したのです。その県のスポーツ振興課とか健康教育課の人たちは日々の努力みたいな何か偉そうなことを言っているのですが、でもそこをちょっと外れて学校現場のところで体力テストの点数がすごく上がっていますけれども、どんな取組されていますかって雑談に近い話で聞くと、県から上げろってうるさいので、まずは測定の仕方と

か生徒のやり方次第で随分違うのだとかいうことがあるから、測定をいきなりしたら、絶対どうやっていいか分からなくて反復横跳びうまく跳べない子たちがいるから、やり方を説明して、一定期間やり方について練習させなさいみたいなことが指示として来て、おまえのところ上がったのかみたいなことがやっぱり暗に圧をかけられるので、その前の体育の何時間かは体力テストのための体づくり運動と称してそっちの練習をやって、練習するだけで随分違うみたいな話をしていましたけれども、あと測り方とか、先生のカウントの仕方とか、何かちょっと小手先だなんて僕はすごくがっかりしてというか、でもそういうことかって逆にちょっと腑に落ちながら帰ってきたことがあったので、だから福島県も下がったから、上げましょうって言い過ぎると、もうそっちの方向に行ってしまうのです。でも、それって結局無理やり運動させられたとか、今日も体力トレーニングかってなったら、体育で運動するけれども、それ以外でも運動なんかしたくないってなったら本末転倒なのです。やっぱりこれを上げることを目標ではなくて、いかに子供たちが運動面白いねとか、楽しいねとか、体力つけたいねとかってなって、生涯スポーツをやる中でずっと続けることによって、そのお父さんの子供を運動の場に連れていくという大きな循環を回さなかったら、結局は誰のためにこの数字を上げるのだろうというふうになってしまうとよくないなというふうに思うので、長期的な話だなと思うので、やっぱり地道にやるべきだし、結果が出ないことでどうこうというふうにあんまり言うてはいけないなというふうに思っています。

福島県としてはできる限りの施策を打ち出しているのです。全国的にも自分手帳とかも含めて体力向上何とか政策もやっていて、縄跳び運動とかも今やっていますよね。縄跳びチャレンジか。ああいうのをどんどん仕掛けて、たくさんいろんなことをやっているのです。これなかなか全国の中では頑張っているねというぐらい発信して、それに対してちゃんと回答を求めてという評価のシステムを回しているのです、教員の人たちは頑張っているのだと思います。ただ、結局それやったからってぐんと上がるわけではないことから、何か頑張っているのにと思っているけれども、でもやられていると思います。

自分手帳については、これはもう実は私はギミック版で簡単にちゃちゃっと試作版を作りましたがけれども、ご存じだと思いますけれども、グーグルのほうにサーバーが切り替わるという話ですよ。それで、大きくベースのところが切り替わるので、グーグルチームが今も冊子版の自分手帳をそっくりそのままデジタルとして移行するやつが仮の段階では出来上がっていて、令和7年で試しに使ってもらって、令和8年からはもう紙の手帳を配付しないで、新しく配付する小学校4年生にはデジタル版を使ってねというふうにしてどんどん移行していくということがもうほぼほぼ決まっているような状態まで来ていますので、デジタル化はされます。あとはそれをうまく継続的に使ってくださいねということが今後の鍵になってくるかなというふうに思います。

では、短期的に何かやれることないのかと私が考えたのは、めちゃめちゃ短期的な施策ですけども、体育館への冷房です。なぜかという、今はどんどん夏が暑くなっているのです、夏休みに部活動

をやろうと思っても、附属中学校で、私附属中学校の校長をやっているの、中学校の事情をちょっと附属中から取っているのですけれども、やっぱり安心安全な部活動にしないといけないということで、前の日に出来ますよね、あしたはアラートで超えますよって。アラートが出た日の次の日は部活中止にしますとしたことによって、暑かったため、夏休みの部活動は半分以上なしになっています。だから、結局運動したくてもできないのです。熱中症になるよね、誰が責任取るのってなるから。なので、今これから体育館を建てるような学校はどんどん冷房がついて当たり前に移行していますけれども、今ある体育館でもやっぱりそういう冷房設備があることによって30度以下に抑えられれば活動できるのに、物理的に活動できない状態になっているので、中学生はこれで運動の機会は随分またあれば増えるなというふうに思います。お金がかかる話ですけれども、短期的に運動の機会を増やすのはこれかなというふうに思います。

中学校段階では、さらに運動部活動の地域移行を今進めなくてはいけないというふうに言われていまして、これがうまく進まないと、学校は部活動をやらないけれども、受皿としてのスポーツクラブがないので、結果として、福島県は中学校での運動部活動参加率が高かったのに、部活動がトーンダウンして、受皿の場所がないとなったら、やらないという子たちの割合が増えることが懸念されます。なので、うまくどういう形で進めていくと、部活の地域移行をしながら子供たちがやりたいスポーツクラブなり運動の施設の中でそれぞれのレベルで楽しく運動できるかということが左右されるのではないかなというふうに思います。つい昨日、神戸市が部活動を廃止しますと言いましたよね。僕ちょっと衝撃というか、やめてしまうのだと思ってちょっとびっくりしたのですけれども、2年後らしいのですけれども、2年後の夏からやりますという話で、ただ神戸市は都会ですから、スポーツクラブとか民間とか、そして芦屋ではお金持っている人がいっぱいいるから、有料の何かそういうのはほとんど多分回せるのだと思うのです。ただ、福島県でそれをやってしまったら、スポーツクラブとか民間とか、それこそ親がお金を出したくないとかということが多分障害になって、運動実施率、中学校はこのままいくと減ってしまうかもなっていると思うので、現行の運動部活動のよさを生かしながら、教員の働き方もセーブして、存続させられるクラブへの移行の方策というのを1階下の8階のスポーツ振興課の人たちと相談して、福島市ではどういうふうにスムーズに移行させて、運動の場をつくりながら働き方改革を進めるのかというのは今喫緊の課題というか、あと1年ちょっとで基本週末は部活動しないというふうにかじが振られるはずですので、そこはちょっと喫緊の課題かなというふうに思います。

以上、ちょっとまとまりがない感じでずらずらとお話しさせていただきましたけれども、体力の向上の何か材料になればと思います。ご清聴ありがとうございました。

(川又康彦委員長) どうもありがとうございました。

では、ご質疑のある方はお述べください。

(宍戸一照委員) 先生のご説明を今いろいろと興味深くお聞かせいただきまして、ありがとうございます。

ました。そうした中で幼稚園、子供の小さい時分からのスポーツ、体を動かす習慣というのはやっぱり大切なのですか。

(小川 宏参考人) もちろんそれはそうだと思います。スタート段階はみんな同じはずなので、まだ差がついていない小さいときからいかに運動させる環境、親がそこに連れてやるかとか、させるかというのはすごく大事なかなと思います。小学校で差がついてしまうと、恥ずかしいとか、何かチームスポーツで迷惑かけるとか、どんどんさらにやらない方向に気持ちが動いてしまうので、まだ訳が分からないうちから、わあいつて走り回らせるのはすごく大事なかなと思います。

(宍戸一照委員) 外遊びというか、外遊びに限らず、昔から鬼ごっことか、ああいうのが非常によかったのではないかなと思うのですが、今外で鬼ごっこなんていうことはもうしないでしょうから、危ないから、そんなところで遊ぶのではないとか、例えばうちなんて近くに神社があって、そこで馬跳びとか、外遊びは盛んにやった、そういう習慣があったのが、今はそういう習慣がないので、外遊びの習慣というのが大切なかなと今先生のお話を伺うと思うところだし、あと例えば小学校でも業間の時間、これがみんな昼休み時間に外に出て遊んでいる。生徒が少ないので、業間で遊ぶ子供が少なくなっていると、みんなで例えば僅かな時間でもサッカーしたりなんなりするという習慣があったと思うのですが、そういうのがもう今は少なくなっているのかなと思うと、先生が今校長先生おやりになっているということなので、その辺の実感としてはいかがなのでしょう。

(小川 宏参考人) 附属中だからなのかもしれないですが、休み時間に遊んでいる生徒はほぼいないです。次の授業の準備とか、教室移動したりとかということでは、授業もやっぱりぎりぎりまでやったりすると、そこから片づけて次の準備ってしていると、やっぱり忙しいのです。前は確かに業間体育ってあったなって僕懐かしく思い出しますが、今やっぱり時間割自体が結構詰め詰めというか、ぎゅっと圧縮してもいろんな委員会活動とか、何かそういったものがたくさん詰まっています、お昼休みも20分とかそのぐらいで、もうだからかき込むぐらいの感じでお昼御飯食べているような、ああ、今の中学生は忙しいなというのはすごく脇で見ていては思います。部活の時間も昔から比べると随分勤務時間内に収めるということで、今冬期間だと5時には終わって、5時10分には完全下校みたいなことが言われているので、今6時間まで授業やった後で、掃除の時間とか入れて、終わりの学活やってなると、50分ぐらいしか活動する時間がない。それだったらバレー部はネット張ったらもう片づけなくてはいけないのではないかなと思うぐらい、何の練習しているのだろうというぐらい、本当にもうちょっとのんびりたくさん、たっぷり運動させてあげたいなと私としては思うのですが、いろんなしがらみがあって、さらにその後塾があるのでみたいな、延長すると、そういう過程も考えなくてはいけないとか、附属特有だと思いますけれども、結構遠くから通学している子たちもいるので、遅くなってしまうと、そこが危ないとか、大変だとか、親がとかみたいなことが起こってくるので、いろんなことでいうとぎゅっと圧縮するしかないというのが実情かなと思います。

(宍戸一照委員) これは本県だけではないと思うのですが、やはりそういうような部分におい

て、学校生活において体を動かす時間というのが減ってきているのが、本県なんかですと震災があって、あとその後コロナがあってだから、やはりそういうような部分での肥満傾向、運動をやらない傾向というのが、もうできなくなっているのか、やらない傾向になってきているのかという問題もあると思うのですが、そうした中でこの前教育委員会のほうの現在の施策について伺うと、やはり体育の指導、体育の時間に運動を楽しむ、運動が楽しいというふうに運動の面白さを伝える授業を体育の授業の時間にやるのだというようなこと、それがやはり肝腎なのだとこの前聞いたわけですが、現実問題として専門家の立場からいうと、そういうような指導というのはどうなのかなと、子供たちがそれで楽しめるようになるのかなんて思ったりするのですが、運動に親しめるというか。

(小川 宏参考人) 体育の授業も昔から比べると、昔はもうちょっとおおらかに運動量がとても多い体育の授業が多かったと思うのですが、最近は体育の授業でもちゃんとＩＣＴを使いなさいとか、話し合い活動が大事ですよみたいなことがほかの授業と同じように求められていることによって、やっぱり50分の授業の中で動いている時間は何分だろうというような授業は結構多かったりとか、それも上手に回せる先生はちゃんと運動時間を確保するのですが、あれ入れて、これ入れてって何かうまく集約できなかつたりすると、またさらに短くなって、話し合いしかしていないみたいなことが起こったりもするので、体育もやっぱりそこが求められ過ぎると本末転倒なのかなと僕はちょっと思っていて、その話し合い活動はほかの教科でもやれるから、もっと体育ならではのところを大事にしなくてはいけないのではないかなというふうに思っていますけれども、そういう今学習というふうに何か縛られているところがすごくあるので、体育の先生方はちょっと大変だなとは思いますが。単に運動させればいいでしょうというのは逆に批判されてしまうので。

(佐々木優委員) ありがとうございます。今のお話もすごく興味深いなと思って、その中身についてちょっと聞いてもいいでしょうか。ＩＣＴで、体育の時間に求められるＩＣＴとか話し合いの時間って具体的にどういうことがあるのでしょうか。

(小川 宏参考人) 一番体育でＩＣＴが使われやすいのは、例えばマット運動などを友達に撮ってもらって、自分の運動を映像で見えてみて、誰々ちゃんはここがあれだねみたいなことを比べたりとかというふうにするみたいなことが結構、ダンスにしてもみんなの踊り合っているかなみたいなことを後で確認してとか、ゲームでも、子供たちがゲームを見てこれ分析できるのかなと思いますけれども、見て誰々ちゃんのところにもっとこっちに動いたらみたいな話し合いをさせなさいという意向が働いているというふうに、ちょっとそこ別に使わなくてもいいのになと思うところでも、僕の授業でもちゃんと使っていますよみたいなことを言わないといけない空気になって、さっきちょっと言いましたけれども、ＩＣＴを使いなさいというのは、目的のために必要だから、使うならいいのですが、とにかく使えみたいな流れになっているのはあんまりよろしくないかなと僕は思っていますけれども、そういうことです。

(佐々木優委員) 平均をすると下と上と出てくるわけですがけれども、例えば体力の面でとか、高いところはずっと高い状況にいる、例えば都道府県別でとかというのってあるのでしょうか。ずっと高い位置にいる都道府県があるとか、そういう実態というか。

(小川 宏参考人) それでいうと、秋田県と福井県はずっと上位、学力もそうですけれども、ずっと上位を占めています。だから、そういうやらせ方が徹底しているのか、それによって本当に体力が高まっているのか、そこはちょっとはかり難いですがけれども。

(大平洋人委員) いろいろありがとうございました。非常に興味深かったのが、肥満児の出現率のところのお話の中で、女子が何かちょっと高校生になると高くなってくるという傾向があるというのをこの表、19ページの表の中でご説明いただいたときに興味深かったのですが、実はたまたま、うちの子は男の子なのだけれども、PTAの集まりがあったときに、ちょっと感覚的なお話らしいのですが、学校の先生のほうで中3の女の子が非常に給食を食べないという問題があって、ということは中学校の上になってくると、先ほどもお話ししていたと思うのですがけれども、結構ダイエット的なものがあるのに、高校になるとたがが外れる、よく分からないですが、そういうふうになってくるというのはちょっと意外な気が僕はしたのです。女子というのはすごく、福島だからというお話もちょっと、ジョークという意味合いで言ったのかもしれませんが、全国的にはそんなことないのではないかなと、やっぱり女生徒はあんまり食べないのではないかなと思うのですが、肥満率が高いというのはちょっと意外な気がしたのですが、その辺の分析とかというのはどういうふうにお考えなのですか。体力が悪くなっているということも含めてなのですか。

(小川 宏参考人) いえ、体力は要するに全国に比べると高校はいいのです。だから、動ける肥満児というか、その割合が高い。だから、高いけれども、運動能力はあるけれども、あんまり食べることに對してそんなに気にしないのかなとは思っていますけれども。だから、全国はちょっと下がっているのに、高校の女子だけぐっと逆に離れていくみたいなことがあるということは、全国的な女子高校生の意識としてはそうやってあんまり太りたくないとかという意識は一定働いているのかなと思いますけれども、女子はその割合がちょっと少ないのは、いわゆる都市部ではないところでのあんまりそういう気にしないって、別に食べたいものを食べて運動したいから、運動するみたいな、そういう自然な子供たちが多いというふうに捉えられるのか、ただそれは先ほども申し上げたとおり、だとしたら秋田県なり山形県なり、同じような田舎で同じような傾向が出ないとおかしいはずなので、そこはデータがないので、分からないですが、ということです。福島県の中でのデータでもちょっとありましたよね。動けるでぶなんて言ってしまいましたけれども、結局運動能力があるけれども、食べることに對してあんまり制限が全国に比べると働かないというか、食べたいように食べて、運動したいように運動するという田舎っ子らしい、何かそういうことなのかなと思いますけれども、でも男子はあんまり気にしないですから。女子はやっぱり全国的には気にする子は都会になるほど多いのでしょうけれども、そうではないのかもしれないというふうには想像はしていますけれども。

(大平洋人委員) あと、確認の意味なのですから、想像ですから、それというのは中学校までは学校給食があるけれども、高校からなくなってしまうから、たがが外れてしまうというイメージなのですか。

(小川 宏参考人) それもあるかもしれないですね。ただでも、それって全国同じではないですか。

(大平洋人委員) そうですね。それは想像つかないということですね。

(小川 宏参考人) そうです。だから、ちょっと分からないところがある。

(大平洋人委員) 分かりました。ありがとうございました。

(小川 宏参考人) これが3年ぐらい同じように続くのであれば福島県のこれは特徴としてちょっと注視しないといけないとなるのですけれども、ただ、これも抽出データであるので、だからその年、その年で、年度で結構やっぱり差とかが変わったりするし、抽出した学校の中での割合でも結構変わったりする、もちろん統計上、十分な数を取っているはずなのですから、意外と動くなというふうには見ていて思うので、令和4年度はここがちょっと特徴的に出たということでもあります。

(石原洋三郎委員) どうもありがとうございました。18ページのところでなのですから、度々ご説明あったのですが、高校になると男女ともに全国を上回っているということなのですから、この要因というのはやっぱり高校での部活動が主な要因ということなののでしょうか。

(小川 宏参考人) 高校の部活の所属率が高いというのはあんまり聞いたことがないので、僕が知り合いの高校の体育の先生に聞いた感じだと、何か測定を真面目にやっているよという話を聞いたことがあって、福島県の高校でやりなさいねって言われたことをちゃんとこういうふうにするのだよと説明して、ちゃんとやっているという、だからそこは全国的には高校ぐらいになると体力テストなんてみたいなことで、先生方もまあ取ればいいのだねってちょっと流しがちになってしまうと、どうでもいい、とにかく報告を上げればいいのでしょうということになりがちなのを、福島県の高校の先生方はいや、意外とちゃんとやっているぜ、みんなみたいな話をしていたので、結構真面目に体力テストについても、震災の影響があったから分かりませんが、その意識が高校の体育の先生方にもある程度あって、体力が上がったかどうかちゃんと測るやつだから、しっかりとやりなさいねという指導をしていて、全国との体力テストに対するモチベーションというか、意識がちょっと逆に高いことで上がっているのかなとは思ったりもしています。

(石原洋三郎委員) そうしますと、いろんな要因があるのでしょうか、高校になると全国を上回っているということであれば、何となく小学校、中学校というのはちょっと体力が仮に落ちているにしても、高校の段階で上がっているの、今までどおりのような形で進めていってもいいのかなんて一瞬ちょっと思ったりもしてしまうのですけれども、その辺りはどうなのでしょう。

(小川 宏参考人) それも高校の先生が言っていました。最終的に全国を上回って社会に出ていくのだから、ここはあんまり気にしないでいいのではないかという発言をされていたのですけれども、でも12年間の福島の運動に対する教育の成果が最後のところではここまで上がっていくというふう

考えれば、確かにここをそんなに頑張らないとということを言わなくてもいいのかもしれないなと思っていますけれども、ただ高校の取る精度の違いだとすると、さっきの頑張らせて取ると成績が上がるのと同じで、では本当に高校生の体力自体が全国に比べて高いのかどうかはやっぱりちょっと逆に疑わしいところもあるということなのです。全国で流して取っているのだったら、本当の体力ではないかもしれない。小中については、全国でもまあまあ真面目に取っていて、より真面目に取ったところは成績上がりますけれども、基本やっぱりこういうの気にするし、全国の数字が出るから、各県でもある程度同じぐらいのモチベーションで体力テストに臨んでいるはずなので、そこが全国よりもちょっと下回っているということは、やっぱり同じ水準で測っているようなことで下がっているということは、体力的にはちょっと劣ると見ておいたほうがいいのかなというふうに思います。

(石原洋三郎委員) そうしますと、中学校のところで先ほど兵庫県の話とかもいろいろあったかと思うのですが、今後の方向性としては部活動をやっぱり盛り上げていったほうがいいのか、あるいはあまり部活動という、何が何でも部活動ではなくて、そういう民間のほうにシフトさせるというか、先生の負担を減らすとか、そういう方向に行ったほうがいいのか、その辺りはどうなのでしょう。

(小川 宏参考人) 神戸市とは違うという話をさせていただきましたけれども、結局民間にそのまま同じように移行すればいいよねって、もう学校ではやらないからねというだけだと、受皿が少ないので、どんどん落ちていくだけかなというふうに思います。そのため、移行の形は取るけれども、学校もある程度面倒見るといふふうにしていくほかないなというふうに思っていて、ただ教員自体がこれまでと同じように週末も大会に引っ張っていったりとか、練習に付き合ったりとかということは当然働き方改革の点ではできませんので、そこは例えば僕が考えているのは、学校の部活動がそのままでもクラブ化する、クラブとして大会に参加したりする、週末頑張りたいところは別に日曜やってもいいけれども、そこは学校の先生が顧問としては立ち会わない。だから、そうすると外部の指導者を有料で雇う、もしくは得意な保護者の人が指導者になるみたいな、誰かがクラブのリーダーというか、スタッフになって、そこで回していくような形を取りつつ、平日はでも部活動ができるわけですから、5時までとか5時半までとか制限ありますけれども。そういうところの平日の部活動は部活動として基本的に行いながら、そのままの形では大会には出ないよというふうにしなから、逆に頑張りたい子は、地域で頑張っているクラブがあるから、そこに行けばいいし、そうでもないけれども、ちょっと運動したいねという子たちが放課後の1時間なりを、体育館が空いているから、そこで楽しく例えば運動するという習慣をつけられるように、先生ががあと教えるのではなくて、子供たち自身が自主的にバレーボールやろうみたいなことで運動して帰っていくみたいな、緩い部活動といいますか、そういう環境をうまく整えて、2段階、頑張りたい子は外で頑張ればいいし、そうではない子供たちでも運動できるよねって、ここでいうことを推進していくことで、地域にクラブがなくても多分回せるのではないかなというふうには思っています。そうすると、逆に部活って入るともう集合とかで

それ最優先で生活しなくてはいけないから、運動があまり得意ではない子は逆に入ったら大変なことになるなと思ったりとか、足引っ張るなと思って入れない子たちが現状いるのです。逆にその子たちは最初からもう地域行きますって言うてしまうと、こっちはそんなに頑張らない子たちが、ちょっとでも運動したいよねという子たちがやれる環境が新たに生まれる可能性もあるなと僕は思って、何かそういう線引きというか、そういうルールがありますよって福島でうまく出せれば、何かスムーズな地域移行ということがやりようであるのではないかなと私は考えています。

（石原洋三郎委員）いろいろと教えていただいてありがとうございます。頑張れる子は部活とかでそのまま頑張れて、頑張れない子たちとか、そういう選択肢が増えていくような何かあれば二極化とかもそんなに進まなくなっていくということですね。

（小川 宏参考人）そうですね。そっちの子たちがちょっとでも運動する場ができれば、逆にプラスに働くかなというふうには思います。それは実はスポーツ庁も言っていて、地域移行に際しては学校の部活動ってでも勝つためにやっているのではないでしょうということを国自体が言っていて、だから部活動の在り方自体も考える必要があるし、例えば月曜日はバスケットやるけれども、水曜日はサッカーとか、そういうそのとき、そのときやりたい集団がそのとき、そのときで楽しむみたいな形の部活動があってもいいよねみたいなことは例示で出しているのです。ただ、今までは先生方が部活といえば何とかで大会頑張るぞというあのイメージしかないのも、今なかなか動かないということもあるので、ここは発想の転換というか、切り替えて、学校ではそういう自由にやりたいときにやれるよという部活動みたいな形をつくっていったほうがいいのかなと思います。

（石原洋三郎委員）どうもありがとうございます。

（半沢正典委員）本日はどうもありがとうございました。ちょっと頭の整理がつかないうちに質問になってしまって申し訳ないのですが、今回の所管事務調査のテーマが、要するに震災以降、福島の児童生徒が体力の低下とか肥満傾向が強いというような形でテーマを設定した経緯があったのですけれども、全国的に比べてそうだよということで、今日もお話を聞いたのですが、聞いてみる先ほどの他県とかという話を聞いたりした中で、では全国と比較して体力がいいとか、何割だとか、肥満傾向が何とかがってどれだけ意味あるのというふうになんか自分でも整理つかなくなって、それだったら子供たちが、生きる力ではないですが、生涯、大人になって通常どおりの体力があって、運動ができるような、それぐらいのレベルをほとんどの子が超えていけば、体をつくる上では特段福島市が全国平均に比べてA、Bの子が全国平均よりこれだけ多かったよとかということよりは、体力を標準以上につけられる子がどんどん増えていくよと、そういう標準以上につけられない子をどうしようかなというふうな発想をしたほうが今後の子供たちのためにはいいのかなと。言っていることちょっとうまく伝わっていないかもしれないですが、上位のほうが平均より幾ら多いとかということではなくて、生きる上でこれぐらいの体力をしっかり身につければ生涯困らないから、これぐらいのレベルの体力をつけられるやり方をみんなで考えようねというような発想の転換を図ったほう

が、事体力に関してはそのほうがいいのかというふうに聞いていて思うのですけれども、先生の感想をちょっと伺いできればと思うのですけれども。

(小川 宏参考人) 全く同感です。全国の競争とかやめればいいのかになると僕は思っていますけれども。全国で何県が1位とかという、ああやって競わせるから、そういういびつなやらせ方とかが起こったりするわけで、でもそれって子供たちのために本当になっているのかなというのは怪しいところがありますよね。結局体力はやっぱり全く運動しなくて、体が全然動けないってなってくると、多分年を取ってからそういう習慣で進んで食べるものだけってなっていくと、やっぱり生活習慣病とかそういったことに多分つながって行って、本人のスポーツライフみたいなことも含めると幸せではないかなというふうに思いますので、やっぱりいかに楽しく運動する習慣をつけてやって、その結果として運動することによって必要な体力がついていくみたいなことが後からついてくれば一番いいわけで、だからそのために今動けない子たちをいかにそういう場にやるかというのは、そういう場をどのぐらい創出できるかとか、そこに促して、やっぱり楽しいね、運動できる子もそんなにできない子もやってみたら、運動したら気持ちいいねみたいなことをいかに味わわせて、生涯スポーツとかそういったことを楽しんで、豊かなスポーツライフを過ごしてもらおうということが究極の大人たちの使命なのかなというふうには思うので、数値を2個上げましょうみたいなのはもうあんまり意味ないのかなとは確かに思います。

(半沢正典委員) ありがとうございます。

(佐々木優委員) 今のことにに関して、環境整備が必要だということで、先ほど体育館の冷房って本当に今最も重要なところを指摘されたと思うのですけれども、先生が考える何か、そのほかに環境整備として必要なものって何かありますか。

(小川 宏参考人) とっさにはなかなか思いつかないけれども、でも小さい子供で運動している子たちってほとんどがクラブとかそういうところに、スイミングだの何だのって結局何か大人たちのところに集められて運動する子たちばかりになっているような気がするので、それこそ宍戸委員おっしゃられたように、昔は神社に勝手に集まってゴムボールで草野球をやったりとか、それこそ川で魚捕ったりとかみたいなことが自由にやれた状況から、今はいろんな安全とかそういったことで公園すらキャッチボール禁止とか、ボールを蹴るなどかということになってしまっているんで、だから思い切ってそういうちゃんと管理者がいた中で、安全を保障した中でボールを蹴れる公園があるとか、いつでも運動できる場があるとか、そういったところでどんどんここで遊べばいいでしょうみたいなことが市とか県レベルとかでできていくといいと思いますし、屋内施設なんかが、それこそそういう施設があれば、外は日射病とかああいうので大変だけれども、あそこに行ったらいつでも運動できるねという場が1つあるだけで違っていくのかなというふうに思いますし、自主的に運動するって大事だと思うので、やっぱり週何回クラブに通って、コーチの言うとおりにやって帰ってきてってなると、そのスポーツしかできないみたいな子が今たくさんいるので、満遍なく身のこなしがいい子ってそんなに

いないみたいな、サッカーできる子は足でしかボールさばけないみたいな、僕の周りの授業でもすぐ足でボールを蹴っています。だから、おまえは足で上手にボール上げれるかもしれないけれども、手で上げれないから、手でやったほうがよくないと僕は言いますが、そういう運動の可能性を広げるみたいなことを体育でやるべきなのに、サッカーを習ったらサッカーしかできないというふうになってしまっているのです。運動を満遍なくやるためには遊びとかがすごく大事だし、仲間つくるのも声かけたりとか、いろんなそういう自然遊びって大事だと思います。それを今自然に放っておくとやれない状況なので、人工的に自然をつくるような状況も大事なかなと思いますけれども、具体的にはなかなか難しいと思います。

（宍戸一照委員）先ほど先生が睡眠時間とか栄養とか、そういうような食生活、生活習慣というのをデータの中でお示しいただいたのですが、子供たちの肥満という側面と、あと体力という側面を考えた場合、日常生活の生活習慣って大きなウェートを占めるものなのですか。

（小川 宏参考人）当然関連していると思いますけれども、結局でも睡眠時間が短いのは、睡眠時間が短いことというよりは、そういう夜まで何か続けてしまったりとかという、その時間の使い方があんまり望ましくないということなのかなというふうに思います。当然いろんな生活の仕方が、運動がある日常というふうにどういうふうにつくっていくかというのが多分大事だと思いますけれども、帰ってすぐゲームやりたいから、ゲームやるみたいになったら、絶対その時間は運動していないことになりますので、そうではない時間をつくって、一定時間運動して、ゲームやるならやってもいいけれども、何時から何時までってちゃんと区切りながら、10時か11時にはちゃんと寝て、朝御飯を食べてというサイクルをちゃんと回していければ健全な子供に育つしかないなと思いますけれども、それは親がほっておいているというか、そういうのに対してあんまり厳しくしつける親が最近いなくなってきたので、子供任せになってしまっているのかなというところもあるかなと思います。

（宍戸一照委員）親の生活観というか、子供に対する生活観というか、これがやっぱり子供のある面において運動しない、あと肥満になるとか、そういうような部分での大きな役割というのは、家庭の親の役割というのは大きいというふうにお考えですか。

（小川 宏参考人）はい、そう思います。特に幼少のときにどういうふうに生活させるのかというのは、その子、三つ子の魂ではないですが、そこがつくられると思います。やっぱり運動好きな親は絶対外で運動しに行こうって連れ出しますし、自分がスポーツやっていれば、その場所に子供を置いて自分がプレーしている姿を見せることで子供も知らないうちにそのスポーツを好きになっているみたいなことは当然循環して起こっていくけれども、そんなの関係ないって、泣くのうるさいから、アイパッドを渡して黙らせるみたいな親の話も聞きますけれども、そんなことをしていたらあという間にそればかり中毒みたいになって、運動よりもそういうのばかりたけてしまうみたいなことに当然なっていくということがあかなというふうに思います。これもたしかデータが出ている話ですが、やっぱり裕福なというか、しっかりした経済的ベースを持っている家庭は学力も高いですけ

れども、運動能力も高いのです。なぜかという、子供に対する教育にしっかりお金と時間をかけられるということがあって、だからちっちゃい頃から運動できたほうがいいよねって親はしっかり考えるけれども、そこに余裕のない親はそこまで連れていけないとか、そんな時間ないとかということではあっておいてしまうと、やっぱり身近なやりたいことに向かっていってしまうということになるかなというふうに思います。

(宍戸一照委員) 先ほど先生がおっしゃったように大きな循環、大人から子供、親から子供に伝えるということが重要ということになるわけですね。

(小川 宏参考人) そうです。なので、そこを大きな循環ではなくて、早く回そうというふうに考えるので、学校としても保護者の方へぜひこうこうこうというチラシなり、そういう通達を出すのですけれども、でも親はそんなに簡単に言われたからって、ではってならないですよ。やっぱり親自身がそういうふうに育ってきていないと学校うるさいなというので、結局家庭の中では自分が主人公なので、今までのしつけ方でいいとか、そんなに時間かけていられないとか、学校で全部やってみたいなことになってしまうので、協力がなかなか得られないということは当然あるかなというふうに思います。

(宍戸一照委員) ありがとうございます。

(石原洋三郎委員) 例えばなのですけれども、今までの既成概念と違って、先ほどの先生のいろいろ頑張れる子は頑張って、頑張れない子もある程度楽しめるようなというお話なのかなと思ったのですけれども、例えば大学生ぐらいになるとよく体育会系のものがあって、もう一つは楽しもうというサークル系のものがあると思うのですけれども、例えば中学校の部活でも体育会系のサッカー部があって、サークル系のようなサッカー部があってもいいのかなと、例えば同じジャンルでも2つぐらいあって、あとサークル系だったら渡り歩けるみたいな、そういうのがあってもいいのかななんて思うのですけれども、そういうことでもないということなのですか。

(小川 宏参考人) いや、理想としてはそれがすごくいいなというふうには思います。サッカーはクラブ化が進んでいるので、ちょっとそれになりかけているのです。つまり学校のサッカー部というのは実はエース級の人たちはあんまり今いなくなっていて、エース級の人たちは外のサッカークラブに入って、そっちのU何とかとか、そっちのほうの団体でがちがちに頑張っているのです、学校のサッカー部ってそこにまでのモチベーションも能力もないけれども、でもサッカーやりたいねという子たちが結構つくっているし、大会自体も分かれてしまっているということがあるので、外のほうが多分あんまり自信がない子たちにとっては上手な子がばりばりやっている中で自分ちっともゲームに交ぜられないよりは、この子たちの中でサッカーのゲームいつでも楽しめるというほうが多分生涯スポーツにはつながるはずなのです、ドロップアウトしにくいというか。それをつくったほうがいいと思いますけれども、現行の部活動のシステムでつまり各先生が1つずつ顧問をやっていることだと、サッカーの種類3種類つくりますなんていうのは当然無理なわけで、そこがネックになって今サッカーとい

ったらサッカー部しかないということになっているのです。そこがもっと生徒の自主的な集まりとして、そこはけがしないようにやりなさいというふうにちょっと後方から支援するぐらいの形でやり取りができるようになれば、1人の先生が3つのサークルを見るなんていうことは可能になるわけで、その程度の活動でよければそんなに危なくもないですし、活動自体も自分たちで考えてやるのだ、最初からちょっと5分アップしたらゲームでもいいのではないみたいなことでやっていけば楽しむということは随分つくれるし、それはこれまではできなかったことなのです。もうサッカー部に入ったらまずパスができなかったらゲームなんかさせないみたいなことで基礎練とかさせられて、つまらないとか、レギュラーになれなくて、俺何でやっているのだろうってなるのが途中でやめて、もう一生サッカーなんかやらないみたいなことになって、結局ここまでつながらないみたいなことがあるので、それをちょっと崩す一つのきっかけが今国から下りてきているということなのかなというふうに思います。

福島大学の私体育会系のバレーボール部の顧問をやっていますけれども、4学年で女子は8人しかいないです。昔はもうちょっといたのですけれども、体育会系の部活に入って4年間部活中心というか、本気で頑張るぞという子たちがどんどん減ってきていて、1学年2人とか3人ぐらいしか入らない。4月は見に来ていますが、やっぱり無理なので、やめそうですみたいなことがぱっと起こって、そのぐらいでぎりぎりチームが成り立っているぐらいの感じなのです。では、福島大学にバレーボールをやってきた人がいないのかといたら、山ほどいるのです。隣の小さい体育館ですと、福島大学だけで何とか経済何とかバレー愛好会とか、何とかというバレーの有名なサークルが3つぐらいあります。それが1団体50人とかで、週に1回か2回男女混合のレク的なゲームやって、その後飲みに行ったりとか、そういうイベントもやったりしながら楽しんでいるのです。何だ、こっちにこんなにいるのかと僕思って、最初の頃は見ていたら結構上手な子がいるのです。あれって、フライングレシーブとかして、上手だなと、どうしてこっちでやっているの、誘ってうちの部活に来なよって、そんなところでくすぶっていないでってキャプテンに言ってけしかけたのですけれども、今まで一人も来たことないです。どうだったと言うと、キャプテンが来て、いや、何かそういうのはもう高校まででいいって言われましたみたいなことでしょんぼり帰ってきて、ええっ、まだ大学生これから伸びるのになど僕は思うのですけれども、でも今思うと、やっぱり高校までインターハイとか春高とか目指して頑張ってきたのだけれども、その苦しい思いもたくさんあって、でも大学に来てまで週5で、週末も土日もどっちも練習なんていう環境ではもういいかなって思うのは確かにあるかなと。それよりはいろんなアルバイトなり、勉強もあればいいのですけれども、勉強とかいろんな活動をする中のほんの1週間の一部分にバレーボールという楽しむのがあるのがある意味逆に言うと健全なのかなって最近ちょっと思えてきて、こっちのコアな集団がちょっとおまえた特殊だなというぐらいちょっと考え方が変わってきました。今そういう時代です。逆に言うところここはすごくハードルが高くなってしまふ。あんなところ無理というふうにみんな思ってしまう。そんなことないのですけれども、ぎりぎりや

っていて、難しいです。

(佐藤 勢委員) 今日本当にありがとうございました。先生から教えていただいた体力テストの取り方でちょっとデータも変わるのではないかと、やり方もちょっと違って来るぞというふうな話を聞いたときに、やっぱりそういうものなのかなというふうに思ったのです。であれば体力テスト自体をもっと厳しくするとか、増やすとか、そういったところに行くのか、それとももう体力テストというのはこんなものなのだと、ある程度データの指標の一つとして、そこまで捉えるのではなくて、参考までのものとして、いろんなものを組み合わせながら、その指標の一つのものの程度だよというふうに捉えたほうがいいものなのか、その辺ちょっと私も分からなくなってきてしまったのですけれども、先生、ちょっとお考え教えていただきたいなと思ったのですけれども。

(小川 宏参考人) だから、それを全国と比べて何位とかを気にし過ぎるのはあんまり健全ではないなというふうに思っています。むしろ比べるのであれば、福島県は同じぐらいのモチベーションで取ってきているので、この10年間で福島県の体力がどうなったか、福島県の過去と現在で比べて何か10年前に比べてこのぐらい劣ってきているねというふうになれば、それは実際だと思うので、その部分ちょっと大事なのではないというふうにして体育の先生のほうに還元してということはあるかなと思いますけれども、全国の順位争いはあんまり確かに意味がないなって。極端にこうならあれですけれども、でもこの辺を推移しているのであれば、県の長年の蓄積の中でどうしても全国の平均したことはなかなか戦えない面があるかもしれないし、福島県としてそれは取り組んできていることの成果がたまたまというか、その位置づけはこうだったし、福島県ってやっぱり地域がすごく広いので、ずっと田舎のほうの子供たちも交ざっている状況で、それは都会中心の県とやっぱり違ったりもするわけですから、あんまりそこと比べて真ん中までしなくてはいけないみたいなことを考えるのは何か違う方向に向かってしまうかなというふうに思うので、過去の福島県と現在の福島県で比べるのは意味があるかなとは思いますが。

(遠藤幸一委員) 今日ご説明ありがとうございました。時間もちょっと限られているところでありますので、端的になのですけれども、先ほど来のお話の中でももしかしたら回答があったのかなというところはあるかと思うのですけれども、運動が特に苦手な子、もちろん得意な子もいれば苦手な子もいるわけであって、そういった苦手な子たちにいかに運動に興味を持たせるかとか、今回の話は違ったりかもしれないのですけれども、そういったところで何か先生のほうでお考えとか、あるいはお聞かせいただければなと思うのですけれども。

(小川 宏参考人) 多分それは幼少から小さい段階でいろんな運動をさせたり、いろんな種目に出会わせるということが大事なかなというふうに思います。今は、先ほども申し上げたとおり、小学2年でサッカーのスポ少に入ったら、いきなりサッカー漬けになってしまう。そうすると、その子にとってはサッカーでうまくいかなかったときに、ほかの可能性がもうなくなった状態の中学生になってしまうみたいなことが極端に起こり得るので、やっぱり満遍なくいろんなことやる中で、これ向いて

いるなとか、これ楽しいなとかということの何かまずはいっぱい試させてみて、だんだん中学校になったときにこういうのが私は合っているのだなとか、好きだなということで部活なり運動なりというふうに向かっていく形が、昔は多分いろいろな運動で遊んだりとかそういうので自然にできていたのだけれども、今は人工的に何かそういうのに入らないと体験できないみたいになっているので、なおさらいろんなそういう体験とかみたいなのがたくさんあって、そこは入ったらずっとそうというふうにならないような仕組みをつくっていきけるといいのかなというふうには思っています。

福島県ではスポーツキッズってやっていまして、最初はエリート発掘だったのです。能力のある子供たちを集めて、その子供たちにトップレベルの指導に向かわせるために何が向いているのかなみたいなのをやるのがメインだったのですけれども、去年かおとし、二、三年ぐらい前にトップの育成をやめようというふうにしたのです。スポーツキッズも、昔は結局体力テストをやって、要するに選抜するのですけれども。だけれども、それをやめて、そういう体力テストもやめたのかな。それで、そのときにトップに選ばれなかった子供たちでもできる協会がやる体験会みたいなことを一緒にやっていたのですけれども、今はトップのほうをやめて、こっちの体験会だけ残しているのです。これは小学校にチラシを配って、何月何日はフェンシングの体験会やりますとか、何月何日の体験会やります。これは、熱心なのは意外とマイナースポーツの競技団体の人たちが、早めに母数を増やしたいなという意図もありながらですけれども、そういった人たちが無料でこのときやるので、ぜひ来てくださいみたいなことをやっていて、これは結果的には僕はすごくいいなと思って、得意、苦手関係ないけれども、ちょっとやってみない、フェンシングなんかすごくオリンピックで今有名になりましたけれども、どこに行ってもやれるものなのかさっぱり分からないのですけれども、学校にチラシ来て、あっ、フェンシングここでできるのだったってなったら行くではないですか。ああいうのをたくさんそろえてあげると入り口が確保されて、面白いってなったら、これどこでできるのですかってなって、協会の人から教えてくれてつながっていくというようなことがあるから、何かそういう入ったらやるしかないみたいなことではなくて、ちょっと体験でみたいなのが広く間口があったらやりやすいかなというふうには思っています。

(川又康彦委員) 最後に、先生、1つお伺いしたいことがあって、先ほどある程度平均的な部分まで底上げしていく方向性というのも大切ではないかという意見に対して先生に伺ったのですけれども、少し極論的な話なのですけれども、頂いたデータのところから震災前からも福島県において不得意な科目といいましょうか、上体起こし、シャトルランなど全国平均に比べると低いと、震災前からも低くて、今も低いままだというようなデータだと思うのですけれども、柔軟性と持久力というこの2つの側面について強化の部分から科目の部分とか、その部分についてこれは伸ばしていきましょうよというような方向性というのはあり得るような話なのか、ずっと県の中でそういう話が今までもあったようなことがあればご教示いただきたいと思います。

(小川 宏参考人) 8種目あって、やっぱりたくさん劣っているところもあるし、そうでもないところ

ろもあるのですけれども、ただそこが劣っているから、そこだけ頑張らせるってなると、難しくない
というか、方法は、持久力を上げるのであれば長距離走とか、そういうシャトルランとかをいっぱい
やらせればいいのしょうけれども、さっきの話に戻りますけれども、でも8種目で落ちているから、
ここを上げてということよりは、運動ができる子たちもいるけれども、やっぱりあんまりできない子
たちがいて、この子たちの平均でそういうふうになっているわけなので、やっぱり運動が苦手だとか、
運動に対して積極的になれないとか、そもそもあんまり運動したくないとかという子たちのモチベー
ションをいかに上げる環境を整えることで、こっちのDとかEとかの子たちの割合がCとかに上がっ
ていくことによって、持久力が下がっているから、頑張れと言って、A、Bの子たちも頑張らせても
限界あるし、逆に嫌いになられたら意味がないので、運動はやっぱりネガティブな子たちをいかに全
体的に上げていくことによって全体の数値は多分結果的には上がっていくのかなと思うので、その環
境を整えるのが大事かなと思います。

(川又康彦委員長) ありがとうございます。

そのほかございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) それでは、以上で質疑を終了いたします。

この際、参考人の小川宏様には委員会を代表して一言お礼を申し上げます。本日はお忙しい中、文
教福祉常任委員会のためご出席くださいます。また貴重な意見を述べていただきまして、心から感
謝申し上げます。震災後の体力の変化、それにも増してコロナ禍で相当大きい影響があったというこ
とについてデータを基に改めて確認させていただきました。本日は本当にありがとうございました。

それでは、ここで暫時休憩いたします。

午後3時03分 休 憩

午後3時09分 再 開

(川又康彦委員長) 委員会を再開します。

参考人招致の意見開陳を行います。

本日の参考人招致に関してご意見を伺いたいと思います。ご意見のある方お述べいただきたいと思
いますが、順番で回らせていただければと思いますので、大平委員のほうからお一人ずつお述べいた
だいてよろしいですか。

(大平洋人委員) 私は、聞いたとおりのところですが。急に指されたから、びっくりしましたけれども、
何も考えていなかったですけれども、それから先生のほうから説明があった震災とコロナの状況とい
うのはあまり関連性がなかったような感じがしたわけですが、福島県はあまり体力的にはいい
成績ではないこと、あとやはり質問もさせていただきましたけれども、肥満の出現率が高校生になっ
てくると一気に増えてくるというのが非常に興味深く感じましたし、やっぱり中学校までと高校では

相当差が出てくるのは何かたががなくなってしまうような感じもしないこともなかったような感じですけれども、肥満の出現率が女性に多いというのがちょっと意外な感じがしたというところに、研究ではないですけれども、我々も何らか手だてがあったほうがいいのかなという感じもしたというのが興味深く先生のお話を聞いて感じたところでした。

(半沢正典委員)先ほど質問させていただいたところが意見開陳のような形になってしまうのですが、どうしても自分の小さいときの実体験とか、また数字を比べたりということで、子供の体力についても同じように当てはめたところがあるのですけれども、事この体力面に関しては全国で比べたり、また肥満もそうだと思うのですけれども、多分肥満が急に多くなったなんていうのは、では肥満が少ないから、高校生は、子供は健康なのかというと、イコールではない可能性もあるのだろうと思うのです。やっぱり本来は摂取しなければいけないカロリーを摂取しなかったりというようなこともあるかもしれないので、数値的なものを追いつけて全国平均を超えた、そしてまた低いというのはさほど事体力に関してはやるべきではないのかなということを今日の参考人招致で一番感じたところであります。なので、やっぱり注目すべきは子供たちが運動したいとか、運動する習慣があるとか、結果としてこれから生活習慣病にならないような体づくりを、基礎をつくるとか、そういうところに着目した上での小中学生の体力づくりというような観点も今後、これから必要になってくるのかなというふうに今日の参考人招致で感じたところであります。

(佐藤 勢委員)私もやはり同じような感想を受けまして、体力テストを非常に重要視していたところがありました。ただ、そこまで重要視するというよりも、参考の一つとして捉えるというのが大事なのかなと。それよりも様々な運動をする機会だったりとか、運動に触れる、そういうふうな機会をいかにつくれるかというところの環境整備、そういったところが大事なだろうなというふうにも思いましたし、あとやはり生活習慣と併せて睡眠だったりとか、あとテレビゲーム、スマホとの付き合い方とか、そういうふうなところをもう少し考えていくべきところなのかななんていうふうに私の中では思ったところです。

(佐々木優委員)学校の体育の授業の中でも運動、体を動かすことだけではなくて、ほかのことにも時間が取られているということを改めてお聞きして、貴重な体育の時間をどういうふうに過ごすことがいいのかということを考えさせられたなと思います。今も出ましたけれども、やっぱり体力テストのためのテストになってしまうということは本当に本末転倒だし、これは学力テストもそうだと思うのですけれども、楽しむことを目標にするということが重要なのだなということを改めて感じました。そのためにはやっぱりいろんな機会の創出とか環境整備が必要で、なかなか友達と外で鬼ごっこをするとか、そういう環境に今ない中で、どういうことがニーズとしてあるのかということとはちょっと調べなければいけないのかなと思いましたが、とにかくやっぱり環境整備でやれることはあるのではないかなというふうに感じます。

(遠藤幸一委員)皆さんと同じなのですが、小中学生の体力向上ということでやっていますけ

れども、前回の意見開陳でも私もお話ししましたがけれども、先ほど来もあるとおり、幼少期、小中学校に上がる前の運動機会というのも非常に小中学校に上がってからの運動機能という部分では大事なのではないかなというところで、施設というか、そういった設備面もちろん大事でありますし、先ほどの質問でもちょっと触れましたけれども、やはりそういったきっかけづくりというところで、幼少期からのきっかけづくりも大事なのだなというところで改めて認識したところであります。今回は、先ほど先生のほうからスポーツキッズですかね、ちょっと私も知らなかったのですが、先ほどちょっと調べましたけれども、県のほうでそういったものを取り組んでいるというところでありますので、そういったところも今後市として、単独で開催という難しいと思いますけれども、そういったところも検討に上げながら、PRも含めて幼少期からのきっかけづくりというところも重要な視点だなというふうに改めて認識したところでございます。

（石原洋三郎委員）自分の子供の頃とかですと、小学校のときとか育成会の活動がありまして、盛んで、ソフトボールとかサッカーとか、サッカーはちょっと、たしかスポ少だったかな、部活ではなかったような気が。

（穴戸一照委員）スポ少でしょう。

（石原洋三郎委員）スポ少ですかね。小学校のときそういうのがあったので、学校だけではなくて、何か受皿が地域の中にあったのかな。そういうところでいくと、現在ですと確かに専門的な部分が多くなってきているので、やっぱり間口がいろいろ体験できるようなものが多いような仕組みづくりというのができればいいのかなんて思った次第です。特に中学生ぐらいのときですと、部活に一回入ってなかなかやめづらいというものもあると思いますので、可能な限り頑張れない子が伸び伸びと楽しめるような、そういうサッカーAチーム、Bチームみたいな、そういう2段階方式があってもいいのかな。ただ、それはいろいろ労力がかかるので、予算とかかかるので、あれなのですけれども。私が小学校のときにサッカーチームで、最初学校の先生が面倒見ていたのですけれども、それがやがてある友達が地域のサッカー好きなコーチを呼んできて、いつの間にかコーチが指導しているような状況になって、先生がちょっとそのコーチに任せてしまっているようなところもあったので、そういう先生だけに部活の負担を負わせるのではなく、そのほかに任せられるような体制づくりであったり、子供たちもいろいろチームを変えられるような、専念したい子はもちろん専念できるような、そういう仕組みづくりが必要かなんて思った次第です。

（穴戸一照委員）私が質問して先生に回答いただいた中で、皆さんあれの中でも1つの考え方として、この体力テスト、全国的な平均値の中での考え方として、全国的な比較検討ではなく、同じ福島県なら福島県の今までの経年的なデータの比較のほうがより適切ではないかというふうなお言葉があり、これはやはりちょっと考え方を改める必要があるのかなというふうにまず第1点は感じたところです。やはりそういう見方も必要なかなと。単なる全国的な平均で下がっているから、どうだこうだということではなくてというふうな見方が1つありました。

あともう一つ、先ほど遠藤委員からも出たように、やっぱり大人と子供の大きな循環、大人から子供へ伝える循環、幼少期から体を動かすとか、そういうものの楽しさはやっぱり家庭の生活環境の中で、あと睡眠時間とか食生活とか、そういうものもあると思いますけれども、家庭の役割というか、これがある程度大きいのかなと。先生のお話を聞いて、緩やかな生活の中でのやはりそういう生活習慣、運動する楽しさを知っていく、外遊びをしていく、そうした中でのあれを持っていく必要性があるのかなというふうに感じました。

あともう一点は体育の授業、前回教育委員会から聞くと、体育の時間に運動の楽しさ、スポーツの楽しさを教えると、喜びを知ってもらいたいというふうなことだったのだけれども、小川先生のお話を聞くと、小川先生自体が懐疑的だったというか、やはり方式とかそういうものにとらわれて、ICTを活用した何だかんだとか、それで果たして本当に子供たちが運動の楽しさを覚える時間なのか、また絶対的な運動量も少なくなるのではないのというような危険性があるのではないのという、自分自身が中学校の校長先生をやっているながらも、そういうことでの、附属中学校だから、そうなのか分からないけれども、そこら辺の学校の授業時間で、業間で外遊びとか、休み時間での外遊びができない分をというふうなことをこの前市教のほうでおっしゃったけれども、その辺がどうなのかなというふうな思いを今日の先生の話聞いて思ったところです。

(川又康彦委員長) 私自身は、今日先生の資料とお話を伺って、震災以降、合計平均という形でしたけれども、やはり震災で全国に比べると体力は相当落ちたのかなというのを改めて確認できました。市教育委員会から提示された資料というのは平成25年からの資料が中心になっていて、震災後の体力についてというような形だったので、震災前後の部分で比較したものを初めて如実に見て、やはり相当落ちたのだな。ただ、ここ数年については、コロナの影響もあるのかもしれないですけども、全国平均には確実に近づいている、震災前がそうであったようにひよっとすると自然に平均を上回るかなという気さえするぐらいの感じはしました。ただ、先生のお話の中で一番印象に残ったのは、中学校で運動する機会が多い部活動がこれからどうなっていくのかというところが非常に危ぶまれているということで、ここで運動する機会を子供たちに与えることがきちんとできるのかできないのかというのは、部活動の在り方にも相当依存するのだらうなというのを改めて感じましたので、その辺についても何らかの話がこれからできればいいのかなというふうに感じました。

それでは、今お話伺った意見開陳以外にご意見のほうはこんな話もありますということがどなたかございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) では、意見開陳のほうありがとうございました。

本日いただいた意見については、正副委員長手元で内容を整理させていただき、調査のまとめの際にお示しさせていただきたいと思います。

意見開陳は、では以上といたします。

次に、その他に移ります。

行政視察について協議事項がございます。今回の視察にあたりまして、特に冷房関係の件ですが、当局側より職員の同行について申入れがありました。同行者は教育委員会事務局教育部長の1名が想定されておりますが、正副委員長としましては、先進地の取組について当局側にも共有いただくことは本市における今後の施策展開に資するものになると考えますので、当局職員の同行について了承したいと思いますが、委員の皆様のご意見をお伺いしたいと思います。異議ございませんか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) では、そのようにさせていただきます。

そのほか委員の皆様から何かございますか。

(半沢正典委員) 全行程一緒なの。

(川又康彦委員長) 全行程一緒です。

そのほか何かございませんか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(川又康彦委員長) では、以上で本日の文教福祉常任委員会を終了いたします。

午後3時25分 散 会

文教福祉常任委員長

川 又 康 彦